

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

実験性の生態学——人新世における多種共生関係に関する比較研究

Ecologies of Experimentality: A Comparative Approach to Multispecies
Coexistence in the Anthropocene

2. 研究代表者氏名

モハーチ ゲルゲイ

Gergely Mohacsi

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

4. 研究目的

近年、新薬の臨床試験や遺伝子組み換え作物の試験栽培が例示するように、科学実験の現場は実験室から社会へと浸透していく傾向が顕著に見られる。この展開の背景には、科学技術への市民参加の拡大や、多種多様なデータ処理技術の急激な進歩など、社会的かつ科学的な要因が挙げられる。このような従来の科学実験が閉鎖された空間と時間から、社会全体へと拡大していくという展開を、「実験性」

(experimentality) と呼ぶことができる。本研究では、この「実験性」において人間と動植物との相互作用がどのように再秩序化されるのかを、国内外の人文・社会科学で近年関心が高まる「人新世」(Anthropocene)と日本で展開している「環世界」および共生研究との対話を通して比較検討する。科学技術への期待やイノベーションの状況が共生そのものの存在論的な基盤となることを人文科学の視点から分析研究するために、本研究では目的を二つ設定する。一つ目の目的は、人間と他の生き物との共生関係をめぐる変遷を描き出す事例の比較研究を重ね、「実験性」における共生関係の政治的、科学的、情動的な結び付きを明らかにすることである。二つ目の目的は、人新世の人文科学における水平的な方法論の展開を受け止めて、実験的な多様性の可能性を提示することである。

From randomized controlled clinical trials of pharmaceutical products to the field testing of genetically modified organisms or smart city experiments, in the past half century the site of scientific testing has expanded from the

laboratory to society at large with all its political and ethical implications. These changes have been prompted by the increasing level of lay expertise and public participation in technological innovation, as well as by the rapid progress of data processing and computational infrastructures. We call the wide-ranging consequences of this transformation

“experimentality.” How has this public participation in experimentation reshaped the relationship between humans and other living things? In what sense can techno-scientific innovation be thought of as the ontological ground for multispecies togetherness in the Anthropocene? To answer these and other intellectually pressing questions, this project will engage in a comparative discussion with specialists in the environmental humanities in and outside Japan by building on existing theoretical frameworks such as *kansekai* (Umwelt) and *kyōsei* (togetherness). The aim of the project is twofold. First, it explores the political, scientific and affective reconstruction of ‘multispecies togetherness’ in the Anthropocene through specific case studies and comparative analysis. Second, it provides a methodological ground to engage with the lateral move in the humanities by creating an experimental space for the ethnographic study of multispecies coexistence.

5. 本年度の研究実施状況

初年度である本年度は、コロナ禍という状況の中で、全ての共同研究会をリモート形式（Zoom）にて実施してきた。班員全員が参加できることを最優先に、6回の共同研究会の一部を合併して、合計4日で開催されました。第一回共同研究会での班長（モハーチ）と副班長（石井）による本共同研究の趣旨説明のあと、第二～第六回共同研究会を通じて、「実験性」の概念を近年増加しつつある自然環境と人間社会とのかわりあいに関する人文・社会科学研究の中で位置付けるため、所内外の班員によるレビュー文献の解説と、実験性の人類学（石井）、社会学（モハーチ）、歴史学（瀬戸口・予定）、科学技術社会論（鈴木、モハーチ）などの分野における近年の研究動向に関する発表と討論を中心に研究活動を進めました。若手研究者などのゲストも交えて広く議論を行い、今後の国際的なネットワーク構築に不可欠な知識を得る活動を試みました。本年度の最後の共同研究会では、来年度の中間成果発表に向けて、具体的な内容について議論を開始しました。また、今後の執筆や議論などの共同作業のツールとして、本共同研究のウェブサイトを開設しました。

6. 本年度の研究実施内容

2020-07-11 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 共同研究の趣旨説明

実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 発表者 石井 美保 京都大学人文科学研究所・モハーチ ゲルゲイ 大阪大学人間科学研究科

2020-09-28 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 実験性の生態学：土台と限界 発表者 モハーチ ゲルゲイ 大阪大学 人間科学研究科

2020-09-28 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 Traps and Experimental Systems 発表者 鈴木 和歌奈 日本学術振興会 PD

2020-11-28 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 自然保護、実験、生政治 発表者 石井 美保 京都大学人文科学研究所

2021-02-22 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 実験室からフィールドへ 発表者 瀬戸口 明久 京都大学人文科学研究所

2021-02-22 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究
Keywords for Experimentality Ecologies コメンテーター 班員全員

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

石井美保、瀬戸口明久

学内

石川登(東南アジア地域研究研究所)

学外

モハーチ ゲルゲイ(大阪大学 人間科学研究科・准教授)、鈴木和歌奈(日本学術振興会)、森田敦郎(大阪大学 人間科学研究科)、中空萌(広島大学 人間社会科学研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	9	2			2	21	5			13
		(7)	(2)			(2)	(13)	(5)			(13)
国立大学	3	6	3			2	16	9			4
		(3)	(3)			(2)	(6)	(4)			(2)
公立大学											
私立大学											
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	1	1					4				
		(1)					(4)				
民間機関											
外国機関											
その他											
計	6	16	5	0	0	4	41	14	0	0	17
		(11)	(5)	(0)	(0)	(4)	(23)	(9)	(0)	(0)	(15)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		1	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	2	(0)	1	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、インパクトファクター、掲載論文数、掲載された論文

雑誌名	インパクトファクター (数値)	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
East Asian Science, Technology and Society	0.313	1	R3 (In press)	Toxic Remedies: On the cultivation of medicinal plants and urban ecologies	Mohacsi Gergely

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
不確実性の人類学	中川理・中空萌	R2.5	以文社

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由なし

12. 次年度の研究実施計画

本共同研究の2年目となる来年度は、トロント大学とアムステルダム大学をはじめ、海外研究者との連携に取り組む。この連携を通じて、日本語の「共生」や「環世界」などの概念を用いることにより、国際的に注目されつつある人新世研究の蓄積に新たな視点を導入したい。また各班員は、人文学の方法と現場をつなぐという水平思考を試みながら、「実験性」の概念をそれぞれのフィールドにおける対話やワークショップを通じて科学者、環境保護運動家などに紹介し、実践者固有の概念と比較し新たな概念を生成するなど、共同作業を試みるが見込まれている。具体的な共同研究活動においては、班員や国内外のゲストによる研究発表という形で6回程度の研究会および1回程度の国際シンポジウムを予定している。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	4	4	150,000
	一般旅費	1	1	50,000
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費	1	1	300,000
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				50,000
消耗品等経費				
その他	RA雇用、ホームページ維持費			200,000
合計				750,000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究の2年目となる来年度は、初年の研究動向レビューの中間成果を踏まえつつ、研究班内の具体的なテーマを明確化・比較検討するため、「実験性」の調査研究に欠かせないとされる10個前後のキーワードを解説する用語集をプロジェクトの専用ホームページおよび学術ブログシリーズへ掲載することを計画している（仮題：A Dictionary for Experimentality）。また、最終年度に予定されているシンポジウムの開催に向けて、小規模の国際会議を開催する。